

氏名（本籍）	潮田和也（栃木県）	
学位の種類	博士（芸術）	
学位記番号	甲博第7号	
学位授与年月日	平成27年3月20日	
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当	
学位論文題目	現代における写実表現の研究 ～写実表現に有用なテンペラ・メディウムの技法研究と開発～	
論文審査委員	主査 本学教授	大 沼 映 夫
	副査 本学教授	島 野 安 雄
	副査 本学教授	宮 北 千 織
	副査 東京学芸大学教授	金 子 亨

## [ 論文内容の要旨 ]

### 論文の構成

第1章 はじめに

第2章 既存のテンペラの処方について

第3章 練り込みOGテンペラについて

第4章 練り込みOGテンペラを使用した制作と作品

第5章 日本における写実表現

第6章 おわりに

謝辞

参考文献

## 要旨

本論文は《練り込み OG テンペラ》に関する技法の開発・実践とこれを用いた自身の制作・作品についてまとめたものである。

本論文は《練り込み OG テンペラ》に関する技法の開発・実践という技法研究という面の他に、自身の写実表現はどうあるべきかを、写実絵画の歴史的変遷、各時代の評価、魅力、その危うさ等について、自らの考察を交えてその本質を明らかにし、自らの目指す写実表現とは何か、現代における写実表現とは何かという問題に添って自身の作品制作を通して検証を行った。この論文は技法研究の為だけの論文ではない、技法研究ばかりに固執して絵が描けなくなってしまっただけでは意味がない、故に筆者の写実表現を向上させた《練り込み OG テンペラ》の研究と今後の日本における写実絵画のあり方を考えるという面も含めて検証を行った。

第1章では、テンペラという技法を定義したのちに、日本におけるテンペラの研究についての現状をまとめた。第2章では既存のテンペラ4種、「卵黄テンペラ、全卵に油分またはニスを含んだテンペラ、練り込みテンペラ、OG テンペラ」について、その処方を写真入りで説明した。OG テンペラはそれを紹介する書籍があるものの、記載はその一部にすぎない。OG テンペラの処方は本論文で初めて詳しく記述することになる。すなわち OG テンペラの詳しい処方と図版入りの作り方を詳細に記す事も本論文の目的の一つである。

第3章では、筆者自身が作り上げた《練り込み OG テンペラ》についての処方を実践に基づいて説明してきた。《練り込み OG テンペラ》とは、イタリアから伝えられた練り込みテンペラと、練り込みテンペラの弱点を克服する為に田口安男が日本で初めて開発した OG テンペラを新たな発想で混ぜ合わせ生み出し、他に類を見ない新しいテンペラ・メディウムである。その発想は、既存のものをカスタマイズして混ぜ合わせるというものだが、その効果は絶大なものとなった。西洋で発祥したテンペラ・メディウムは、顔料に卵黄を混ぜ合わせる基本のものから始まり、その後のあらゆる時代、あらゆる作家達により、作家それぞれが自身の表現の為に部分的なマイナーチェンジを繰り返し、その性能や使い方を変えながら現代に引き継がれてきた。マイナーチェンジを重ねたとはいえ、テンペラ・メディウムは、ほんの少し配合されている油分やニスなどの内容物が変わっただけで、その効果の違いは大きく画面に現れてくる。《練り込み OG テンペラ》の特長は厚塗りが可能な上に、細密な表現も可能な汎用性に富んだテンペラであることだ。練り込みテンペラ、OG テンペラ単体ではできなかったことを、二つを混ぜることにより可能にした。また、水溶性でありながら、油絵具のような使い方もでき、油彩絵具との馴染みも良く混合技法にも充分に対応できる柔軟性を持ったテンペラでもある。この新しい処方のテンペラ・メディウムを研究し、開発し、その処方と使い方について詳しく記した。

そして、第4章では、この《練り込み OG テンペラ》による自身の作品の制作過程を写真を使用して順を追って説明するとともに、自身の作品4点に関する制作の意図・動機や使用した画材、技法についての説明もおこなった。

第5章では、本論文のもう一つの目的である写実表現に関して、日本における洋画の歴史と経緯

を説明した後、筆者の写実表現とはいかなるものであるべきかを考えるうえで指針となった岸田劉生、アンドリュー・ワイエス、磯江毅の言葉を取りあげ、写実とはいかなるものであるべきか論究・検討した。その後、現代を代表するいく人かの写実画家達との交流によって得られた見識などをもとに、筆者の写実表現に関する見識をまとめた。あらためて、日本の洋画の歴史を辿ってきたなかで、現代において筆者はどのような画家であるべきか、どのように制作していくべきか、深く考える契機になったのは大きな意味があったと言える。

今回、既存のテンペラの技法4種の処方をもとめるために、それぞれのメディウムをあらためて制作した。そのおかげで、既存のテンペラ4種の特性、個性、良さをあらためて実感するいい機会となった。そして、それらのテンペラ技法と、自身の作り上げた《練り込み OG テンペラ》の処方を比較することにより、既存の4種のテンペラには無い《練り込み OG テンペラ》独自の柔軟性、可塑性、油絵具との馴染み易さの発見にも繋がった。《練り込み OG テンペラ》を使用した制作過程についてまとめるなかで、普段は何気なくおこなっていた筆者の制作中の技法や手順について見直すいい機会となった。《練り込み OG テンペラ》を使用した自身の作品説明では、自身がいかんして作品を制作してきたのか、それらを客観的に見つめることができ、今後の制作のための目標や改善点がより明確になった。

この論文で新しい処方のテンペラ・メディウムを研究し、その処方と使い方を詳しく記すのは、連綿と続いてきたテンペラ・メディウムの研究を正しく引き継ぎ、少しでも前進させるものでありたいと願う思いである。この《練り込み OG テンペラ》の研究をまとめることにより、テンペラの新しい可能性の一端を提示できたと思う。そして、本論文を通読し、《練り込み OG テンペラ》を使用した作家が今後、自分なりにカスタマイズして使い、更に新しいものが生み出されるなら幸いであり、筆者自身も更なる可能性を追及してゆきたいと思う次第である。

## [審査結果の要旨]

本博士学位請求論文は、「現代における写実表現の研究～写実表現に有用なテンペラ・メディウムの技法研究と開発～」と題して書かれたもので、現代の写実表現に有用なテンペラ技法とメディウムの開発という点に関して研究・考察を行い、そして筆者が新たに改良した「練り込みOGテンペラ」というテンペラ・メディウムを用いた作品の制作について解説を行ったものである。

「テンペラ」という技法に関して、筆者は大学に入学してからの最初の実技講義で初めて「テンペラ」の技法を知り、その講義で紹介された米国の写実画家のアンドリュー・ワイエス(1917～2009)の作品(「シリ」・「編んだ髪」など)に衝撃を受けたと、またイタリア研修旅行の際にも現地イタリアでジョバンニ・ベリーニ(1430～1516)のテンペラ作品を目の当たりにして感動したと述べている。そして、その時から我流による古典絵画技法の研究が始まり、技法書を読み、混合技法を実践してみたという。しかしながら、テンペラで描けば描くほど、既存の混合技法の方法論を実践すればするほど、素材の魅力はあるものの、描き進めるにつれてテンペラ層と油彩層との違和感が生まれてしまい、筆者の目指す滑らかな写実的な描写にはならなかったという。そのため学部の卒業制作では、テンペラの使用を止めて、油絵の具のみで描いた作品を提出したという。その後、数年を経てから大学院に入学し、そこで再びテンペラとの付き合いが始まる。

まずは指導教員の石山に勧められたのが「練り込みテンペラ」の改良版であり、これは石山自身が使いやすいように「練り込みテンペラ」にボンドや樹脂分を加えるなどして改良したものである。すなわち、基本的には「練り込みテンペラ」と「OGテンペラ」とを混ぜ合わせたもので、「練り込みテンペラ」の改良版である(なお、OGテンペラの“OG”とは、Oil(油分)、Glue(膠)の頭文字であり、それら成分からなり、卵は使用してされていない)。これを基に筆者自身が改良したのが「練り込みOGテンペラ」であり、この「練り込みOGテンペラ」の開発を行い、かつこのメディウムを用いて作品を完成させて論文に纏め上げたのが本論文である。

本論文は、「図版リスト、第1章・第2章・第3章・第4章・第5章、および謝辞、参考文献」という目次で、本文が全5章、総頁数で80頁により構成されている。

「第1章 はじめに」では、まず筆者の作品の制作に関係する技法についての事が書かれている。特に「テンペラ」作品の絵画についての出会いと驚きとによる思い、テンペラに関心を持つての研究への動機と試行錯誤等が書かれている。そして、「テンペラ」についての定義としての説明と基礎的な研究例(田口安男『黄金背景テンペラ画の技法』美術出版社、1978年など5点)を解説した後、本論文の研究目的とその意義を述べている。

「第2章 既存のテンペラの処方について」では、既存テンペラとされる4種類のテンペラ(①卵黄テンペラ、②卵に油分またはニスを含んだテンペラ、③練り込みテンペラ、④OGテンペラ)について、それぞれの処方と歴史的な経緯を簡潔に解説した後、実際の処方作業の過程をカラー写真で順をおって説明している。

「第3章 練り込みOGテンペラについて」では、練り込みテンペラとOGテンペラの混合メディウムである練り込みOGテンペラを筆者がどのようにして研究し始めたのか、という経緯を述べた後、この練り込みOGテンペラのメディウムとしての特徴を説明するとともに、練り込みOGテンペラの処方についてはカラー写真で詳しく作業工程を説明している。そして、練り込みOGテンペラが自身の制作に適合して、より写実表現に適したメディウムになるように、調合比率や処方方法を改良した点についても言及している。

「第4章 練り込みOGテンペラを使用した制作と作品」では、その制作過程の一例として、筆者が実際に練り込みOGテンペラを使用して制作した際の手順がまず示されている。使用した絵具やテンペラの材料類、デッサン・下絵から完成までの経緯が30枚余りの写真で順をおって詳しく説明されている。そして、この練り込みOGテンペラを使用した作品としては4点（①《あの日見た花の名前を僕は知らない》2012年、②《サクの肖像》2012年、③《本を抱いて黄昏に泳ぐ》2013年、④《尚焔の necrosis》2014年）が掲示されて、筆者の作品に対する制作意図と練り込みOGテンペラの使用感や特性等の解説と考察がなされている。このうち、《あの日見た花の名前を僕は知らない》と《サクの肖像》は第1回ホキ美術館大賞展(2013～14年)に入選、《本を抱いて黄昏に泳ぐ》は第89回白日会展(2013年、於国立新美術館)に入選、《尚焔の necrosis》は第5回全国公募絵画展2014ビエンナーレうしく(2014年)に入選した作品である。ところで、筆者は上記した作品を含めて、これまで多くの作品を制作してきていて、それらの一部は展覧会等に出品し発表してきている。初期のものは油彩画であり、必ずしも練り込みOGテンペラによる作品ではないが、その中では、第11回ふるさとの風景展(2005年、喜多方市美術館)、第60回記念栃木県芸術祭(2007年、栃木県立美術館)、第10回記念フィレンツェ賞展(2008年、雪梁舎美術館)に出品し、そして白日会展には第83回(2007年)からは84・86・89回と出品している。

「第5章 日本における写実表現」では、まず現代の写実絵画との係わりとして、16世紀ルネサンス以降の多くの画家が描いた写実絵画について筆者なりの見解のまとめを行っている。そして、日本における洋画史については、高橋由一と青木茂および工部美術学校に関係した事項、ならびに岸田劉生と磯江毅に関したことを取り上げて概観している。その上で、岸田劉生と磯江毅に関しては、米国の写実画家アンドリュー・ワイズとともに、彼らが述べた言葉を引用しながら、現代における写実表現に対する筆者自身の考えを述べている。さらに、現代を代表する写実画家との交流と実体験で得られた情報を基に新たな制作への意欲と意識が述べられている。

「第6章 おわりに」は、これまでの研究経緯と論考をふまえての纏めであり、写実表現の意義と今後の作品制作に関する展望などが述べられている。

ところで、制作された作品を含めての論文についての評価であるが、筆者の制作の意図や思想の根幹をなすのは現代の写実表現への完成の道であり、それに有用なテンペラ技法とメディウムの研究・開発が目標であった。この命題に完成させるために、絵画の制作に当たっては、従来の油彩画材料のみで制作してきたことには満足感を覚え、新たなメディウムの使用という興味や指導教員による助言などから、テンペラ技法への道が開かれ、研究・開発という新たな改良の方法が目的

の一つとなった。それによって筆者自身が改良・開発したのが「練り込みOGテンペラ」である。そして、この練り込みOGテンペラを油彩の上に用いることにより、人物の皮膚の温度感を伴った生々しさなどが油彩よりも容易に表現できたとも述べている。特に、ハッチングが苦手な筆者にとっては、この練り込みOGテンペラは油彩層とテンペラ層との違和感を容易に解決してくれて、油絵の具の欠点でもある抵抗感のある白色が生み出されたという。そして、筆者の目指す明部の抵抗感のある人物の“肌色”の表現を容易にしてくれたのがこの「練り込みOGテンペラ」であり、このことは筆者の制作した作品に反映されている。さて、「練り込みOGテンペラ」を用いた作品はそれほど多くは制作されてはいないが、出品した展覧会等では入選しており、今後、作家としての将来性も期待できるものと感じられる。

よって、潮田和也「現代における写実表現の研究～写実表現に有用なテンペラ・メディウムの技法研究と開発～」の学位請求論文の審査に関しては、審査員全員により「合格」と判定され、博士の学位を受けるに十分な資格があるものと認める。